

要介護における インプラントの是非と対応

日時：平成29年10月29日(日)
場所：秋葉原UDX



伊藤 準之助 (東京都)

平成29年10月29日、秋葉原UDXにて第1回要介護におけるインプラントを考える会が行われました。台風の影響で大雨にもかかわらず、参加者は160名を超え、会場は満員となり大変盛況となりました。

現在、日本は世界でも類を見ないほど高齢化が進んでおり、健康長寿を延ばす鍵を握っているのは、『口腔の健康』であると言えます。とりわけ、インプラント治療は欠損を回復し、口腔機能の改善に大きく貢献しています。その一方で、要介護の状態から見た場合、口腔衛生状態不良、誤嚥性肺炎や咬傷などの問題も生じています。

インプラントは優れた治療法である、その中で要介護状態を見据えどう治療するか、要介護状態においてどう対応すべきかということを、今回この分野で著名な先生方の講演を聞く機会を得ることができました。



午前は、田中譲治会長による開会講演より始まり、萩原芳幸先生(日本大学診療教授)の基調講演、米山武義先生(米山歯科クリニック院長)の特別講演が行われました。

田中譲治先生からは「要介護におけるインプラントの問題点と対処法」

インプラントならではの利点として、特にインプラントはスクリューを用いることで可逆的補綴が可能であること、ある時期になったらインプラントオーバーデンチャーへの変更をNSO評価に触れながら、症例を通して解説して頂いた。

萩原芳幸先生からは「超高齢社会におけるインプラント治療を再考する」



フレイルの悪循環について、高齢社会におけるインプラントの治療計画・設計に関して、低侵襲、単純な構造、設計の変更が容易、清掃が容易ということが鍵となることを症例を通して説明して頂いた。



米山武義先生からは「患者さんと国民に支持される長寿社会におけるインプラントと口腔管理の近未来」

歯科はただ歯をみるだけでなく、口腔医療へと変化をしている、そして、治療は『治す医療』から『治し支える医療』へ変わってきている。口腔ケアの重要性、インプラントの管理について症例を通して解説して頂いた。



午後からは、教育講演として井汲憲治前会長と武内博朗先生(鶴見大学歯学部臨床教授)が、シンポジウムとして守口憲三先生(日本訪問歯科協会理事長)、当会会員の角田宗弘先生(日高病院歯科口腔外科医長)、小林真理子先生(汐田総合病院歯科口腔外科)、山口千緒里先生(ブローネマルクオッセオインテグレーションセンター歯科衛生士)の講演が行われ、その後に総合ディスカッションが行われました。

第1回 要介護におけるインプラントを考える会



井汲憲治先生からは「超高齢社会におけるインプラントの課題と対応」

インプラントを長期的に機能させるには歯を含めたインプラント

周囲の衛生管理を徹底しインプラントを感染させないことが肝要であり、口腔ケアがいかに重要か、そして今後の展望としてインプラント除去が必要となった場合、カウンタートルクによって除去が可能なインプラントシステムの開発が望まれていることなどを聞かせて頂いた。



武内博朗先生からは「欠損歯列の回復から代謝・体組成を改善する歯科補綴への取り組み」

生活習慣病や全身的な虚弱がおきる経緯に、咀嚼機能低下症がある。咀嚼機能が低下すると、糖質に偏った食事になり、骨格筋量の減少を招き、サルコペニア状態となる傾向があり、インプラント治療は咀嚼機能を回復する優れた医療であるが、それと同時に補綴後は保健指導をすることで健康寿命を長くできることを症例を通して解説して頂いた。



守口憲三先生からは「要介護におけるインプラントの上部構造について」

訪問歯科協会で訪問歯科時インプラントが入っている患者を診察した先生方へアンケートを行ったことからの推察を公表して頂いた。現在のインプラント上部構

造は特に審美面が重視されており、口腔ケアという視点からいえば清掃が困難な場合がある、上部構造と口腔ケアのしやすさの関係について症例を通して解説して頂いた。



角田宗弘先生からは「要介護高齢者の口腔機能保持に効果的なインプラントを考える」

勤務されている病院では、口腔ケアを衛生士が他業種と連携し行っており、その際にOAG(オーラルアセスメントガイド)を用い、口腔衛生状態を評価し体系的なケアをしている。インプラントに起因するトラブルと対応策を症例を通して頂きました。



小林真理子先生からは「要介護時代のインプラント上部構造を再考する」

Back off Procedure 撤退戦略について症例を用い解説して頂いた。要介護を見据えたインプラントの取り扱いとして、設計変更しやすいスクリュー固定であること、ある時期になったらオーバーデンチャーへの設計変更を検討することが望ましいと教えて頂きました。



山口千緒里先生からは「インプラント患者における訪問口腔ケアを考える」

先生にはインプラント治療をされた患者さんが通院困難になり切望され訪問診療を行ったその症例を多く見せて

第1回 要介護におけるインプラントを考える会



頂いた。患者家族と介護者へ、普段の口腔ケアの仕方を丁寧に説明している動画は非常に勉強になった。

以上のように、非常に興味深い内容で先生方の講演を拝聴することができました。

私がインプラント治療を行う際は、患者の年齢、全身状態を把握し、そして考慮して、可能な限りスクリュー固定式の補綴を選びます。そして、補綴後は食事に対する保健指導を行うことで健康寿命を増進し、ある時期やその兆候がみえた際には、可撤性の補綴物へ変更していくような治療がしていきたいと感じました。

とても勉強になり、かつ考えさせられる議題なので有意義で楽しい時間を過ごすことができました、ありがとうございました。



要介護におけるインプラントの考え方 「AKIBA コンセンサス2017」

1. 口腔のケア、オーラルフレイル予防の重要性を意識する。
2. 咀嚼機能の回復・維持により健康寿命延伸につなげる。
3. 変化に対応できるスクリュー固定が推奨される。
4. 時期をみてインプラントオーバーデンチャーへの設計変更を検討する。
5. 介護者・多職種への情報提供、連携、インプラント手帳を活用する。
6. 口腔衛生環境や介護状況、病状などを考慮し、ライフステージに合わせた対応をする。
7. 最後まで寄り添う、治し支える医療を目指す。

付帯事項

- ・ 診療室からシームレスな対応が求められ、Back off procedure(撤退戦略)をも選択肢に入れ考える。
- ・ 設計段階で長寿を迎えた将来に設計変更が必要になる可能性を予めお伝える。
- ・ メンテナンスの確立により予後を確認なものにし、インプラントに対する国民の信頼を勝ち得る。

